竹本土佐大夫の地合輕視に就て

壺阪の放送をきゝて

本誌同人　中野孝一

現役ではない隱居の身の上であつても土佐大夫はやはり淨曲界の最高峰の一人である。殊に世話語りの名手として押しも押されもせぬ第一人者たる王座は微動だにしてゐない。だが最近は文樂座で容易にきかれた頃とは違ひめつたときかれぬ大切なものとなつてしまつたばかりでなく、もはや頽齡のこの人のこと、これがあるひはきゝ終りになるのかもしれないと言ふやうな不吉ではあるがたゞならぬ愛執の思ひもあり、かた〳〵今回の壺阪の放送についての期待と關心は實際並々ならぬものがあつたが、枕をきゝ乍らおや〳〵と聲に出すほど失望したのはあまりに慘めだつた

土佐太夫の藝術に關してはこれまで折にふれて卑見を開陳してきたが、晩年期に入つてからの地合より詞に重きをおいてゐる傾向の一貫してゐることに絶へず物足りなさを覺えつゝも、比較的地合と詞の諧和の渾融してゐる時はうれしくて禮讃し、然らざる時は地合輕視の偏見に遺憾の意を表明してきたのだつたが今度はあんまりひどすぎた。尤あゝいふ淡々乎として白湯を呑むやうな平板な味が孤高玄妙の所謂淨曲の理想境を具現せるものだと語り手はひそかに自負してゐるのかもしれないが、華麗絢爛を通りぬけた平淡味とは似て非なるものではあるまいか。それはこんなへんてつもない味ではないはず、サラリとした中に自然の律呂に叶つた節奏美があつて、微妙な滋味のほかに湧き出るものでなければならぬ。例へば私が淨曲新報で絶讃を惜しまなかつた十二年正月興行、櫻丸切腹の八重の口說の如きがそれなのだ。そう言ふ眞似手のない腕を持つてゐながらこの壺阪では枕だけをきいてゐる間に、一句毎に殆んど連續して語尾をふるはしゆるくせに惱まされた方が多く、陶醉どころか却つて索漠たる氣持にとざされてしまつて、名人大團平が心魂を注いだ巧緻至妙の節附を生かす表現の意圖は、特に味の深い枕の何處にも聞き出せなかつたのは遺憾この上なかつた。

何時ぞや淨曲新報に奈良野憶也といふ人が「土佐晩退論」に書いてゐた「夕霧上下はづれ甲がとどかず大不評のために引退を早めた」云々といふやうな非難とは、私の不滿とするめどは異ふ。あれは單に老衰による聲量の減少を問題にしてゐるに過ぎなかつた。

こうした甘い衆俗の無理解な皮相的な聞き方に雷同して

かれこれいふのではないばかりでなく、あんなことにはむしろ義憤さへ感じる位なのだ。年が寄つたら聲量も減り、霑ひも乏しくなるのはあたり前でも、容姿を賣物とする俳優などとは又別で、心を澄まし、思ひをひそめて工夫すれば美麗奔放の魅力に代る寂びた雅潤な音律美が生れて來べきは當然、藝道捨身の意氣もて精魂を傾注してくれるなら枯淡清澄の風韻掬すべき高い藝境が豁然としてひらけたらうに。もう節調の技巧の修練に不足があるはずもあるまい、やらうと思へばどんな巧みな聲使ひでも洗錬されつくした節廻しでも自由自在にやれる人が、あの枕のやうな、めんどうくさいと言はぬばかりの氣のぬけた語り方をされるとあきらめのつかない愚痴が出るのも無理ではあるまい。

しかし、誰でも老境に入ると總てに熱意を失ふもので、とりわけ俳優などはその役柄にすつかり同化し切つた熱演は不可能になつてくる。人形遣ひにはなれても人形そのものになつて仕舞へないと、最近のサンデー毎日の隨想欄の私といふ役者といふ一文で井上正夫も浩嘆してゐたが、丁度この放送と思ひ合せ、近來年のわりにめつきり老ひ込んでしまつた自分の心境ともなひ交ぜてさま〳〵の感慨に耽つたことだつたが、それはともかく、あの語りはじめの熱の無さ、地合輕視の傾向の顯著なのはそういふ心境の所產である事を裏書きしてゐるかに思へた。今までは地合があつさりしすぎてゐる塩合でも詞だけはいつも生々としてゐたものだに、今度はのつけの詞にもそうした腹構への不足な性根のうすい詞をきかされた。「コレハ〳〵は澤市さん」や「いつそ死んで退けう」の澤市の嘆聲をエエと輕く聞きとがめるお里の呼吸がとつてつけたやうにわざとらしかつた事や、「嫁入りしてから三年の間モほんにほんに露ほども」のあたりがお里よりも土佐大夫を多分に感じさせて幻滅させたことや、一般ファンの耳を澄ましてゐるお里の三つ違ひの兄さん以下の口說がすんとして情味のなかつたこと等等で、これではどうもとうんざりしてゐたが、やつと澤市の「どうぞ花がさかしたいナア」ではじめて本領發揮、それから段々語り進むうちには本調子となり、例の寫實の妙諦を體得した詞の眞實さで人物を浮彫にし、いつしかその幻想の夢幽氣につれこまれてしまつてゐたのは流石である。就中「澤市さんえノー」のお里の絶叫哀喚の感味は素晴らしかつた、でもこの惱亂の描寫は單なる寫實ではない。纖巧細緻の妙技を思ふぞんぶんに驅使して聽手も語り手と同じ息に喘ぐほど强烈な迫力を與へられ乍ら、只、悲痛さに徹するといふだけでない一種の快美な法悅に似たあるものを與へられたことゝ。あとの口說の「報いかつみが情けない」の等類を絶せる表現の皮肉さ——悲哀淋漓の眞態を寫して餘情切々而も藝術の香り豊けき心憎さに讚嘆之を久しうし

た。淨曲の味の極致はまさにかくの如きものでなければならぬだらう。

こういふ調子で表現が統一されてゐれば滿點なのだが。

大正六年一月の演藝畫報に岡鬼太郎氏が伊達大夫についてこんなことを書いてゐる。土佐大夫の現下の藝境と思ひ合せると興味が深いので轉載させて頂く。

「一種の癖のある總てに華かな伊達の藝、これを無闇と歡迎すると、甘い奴だと、師匠からの取次デン通、紳士天狗の御歴々から笑はれるかも知れぬが、イヤ、今年の伊達は決して以前の伊達ではない。士別れて三日なればといふ感がある。暫くきかずにゐる中の彼が進歩失禮乍ら實に意外だ。

それも單に年功といつたやうな計數的な進歩でない。伊達はすつかり眞面目になつたのである。搖つたり、振つたり、廻したりの聲の自由を利用もしくは濫用する事から逃げて、多少は薄くなつた腹に料簡といふものを詰め替へて義大夫をきかせるよりも人間をきかせる方が眞の名を成す所以であると、大いに悟つたらしく努力してゐる。彼の淨瑠璃は追々と眞實になつて行くであらう」。

これはそれ迄の浮華な伊達の藝風が、眞實一路を目指した藝の轉機を祝福し、特に眞を强調して說かれた方便論だらうし、一代の大通の言、强ひて異を樹つるも憚られるが義大夫を語るより人間を語れとはその當時までの伊達大夫になら何より適切な忠言だつたらうが、些か藥の利き過ぎた偏狹さを感じる。これだけが義大夫を極める唯一の道であつてはならない。人間の眞實を語ることが義大夫の究極の理想などと思ふは一種の迷妄だと私は信じてゐる。こうした權威者の言に敎へられたか、先師大隅大夫の藝風繼承を發願したものか、爾來地合輕視の傾向は年を追ふて顯著となり、過ぎたるは猶及ばざるが如き今日の有樣となつたのだ。

今更言ふまでもない事だが、淨曲は日本音曲としては至上最高の完成藝術である。地合の節奏の音樂的美感と、律動化された詞の眞實味とがいみじくも渾然融合して獨特の醍醐味が釀成されたものに吾等はじめて隨喜渴仰するのだ。この意味から言へば凱平に命がけで仕込まれたときく先代大隅大夫の詞に魅力の焦點をおいて、それにおそろしいばかりの迫眞性を附與したあの巨大な眞のこもつた藝術、まま音づかひと情合絡み工合に名狀しがたい妙味があつても地合に音樂美の尠い跛行的畸形の故に完成品としての禮讚をうけなかつたが、これは大隅の天禀の然らしむるところどう心構へをかへてみても、どんなにあれ以上工夫精進に肝惱を絞つたとしても、どうにもなりやうがなかつたのだ大隅としては天分の限りをつくし、至り得る最上至高の境地までのし上げて行つたぎりぎり結着の藝境があれだつた

わけである。しかし土佐太夫はこの人の衣鉢を享けついでゐるにしても大隅大夫よりは天分において惠まれてゐる。心の据え方精進次第で先師の至り得なかつた、撩亂の花園香氣ふくいくの藝園へ自由に獨往逍遙し得るだらうにと殘念でならない。

小ジューマは「舞臺においては魅力は眞理より必要だ」と喝破してゐるとか。この言葉は淨曲にもあてはまらなくはないと思つて、土佐が文樂脱退當時、淨曲新報紙上同人へ宛てた公開狀にかいたことがあるが、今の場合もつとも適切のおくりものと思はれるものから、重ねてこゝに繰り返しておく。

とは言ふものゝ上述の不滿を感じつゞけ乍らも、これは自分の耳、いや心の至らぬために、ほんとの味を嚙み分けられないのではないだらうか？　ときく度毎に峻嚴綿密な反省をしてみるのだが。

果してこれは私の聽き誤りであらうか？　土佐大夫の偏見の罪か？　老境に入つた心境變化の所産か？　先覺諸賢の高教を仰ぎたい。（完）

東都五十義會成績表

乃村	乃菊	吃又	一六三、七五
及川	旭	岡崎	一六一、六七
中田	五口	鳴戸	一六〇、三三
細川	清	鮓屋	一六〇、三三
村田	玉寶	辨慶	一五六、六六
杉本	英	菅三	一五五、〇〇
橋本	三司	沼津	一五四、七五
佐渡	枝蝶	菅三	一五四、〇〇
國友	東光	合邦	一五三、七五
大阪	旭	菅四	一五一、七五
野田	高尾	新口	一五一、七五
須藤	米司	陣屋	一五一、二五
田中	香笑	五斗	一五一、〇〇
佐野	美昇	陣屋	一五〇、二五
新井	よろづ	合邦	一五〇、二五
霜島	錦司	辨慶	一四九、五〇
森	市菊	宿屋	一四九、二五
國森	鳴門	菅四	一四八、七五
井上	龜鶴	赤垣	一四八、五〇
木下	松玉	十種香	一四五、七五
須田	美義	岸姫	一四五、二五
菅原	葉光	八百屋	一四五、二五
錦	錦松	新口	一四二、七五
上杉	文盛	鎌三	一四一、〇〇
影山	淺路	中將姫	一四〇、五〇
奥村	三玉	壺坂	一四〇、二五
鈴木	其芳	竹の間	一三九、七五
安藤	都竹	十種香	一三八、五〇
玉水	吟昔	合邦	一三八、〇〇
小池	司	赤垣	一三八、〇〇
角	盛	柳	一三六、五〇
和田	金扇	野崎	一三五、七五
村山	以津美	陣屋	一三五、七五
宮本	百塚	太十	一三五、五〇
戸田	いさな	紙治	一三五、〇〇
横井	文樂	太十	一三五、〇〇
村上	素水	合邦	一三五、〇〇
高橋	清光	陣屋	一三四、〇〇
藤本	喜鳳	草履打	一三一、六七
富岡	生昇	壺坂	一三〇、七五
飛石	かなめ	中將姫	一三〇、七五
酒井	小靜	百度平	一三〇、二五
小泉	柳汀	鳴戸	一二九、五〇
高木	龍鳳	合邦	一二九、二五
久保田	喜鶴	菅四	一二八、七五
三口	松藤	陣屋	一二八、〇〇
富田	紅陽	菅四	一二八、〇〇
中山	國華	御殿	一二六、〇〇
笠原	清芳	太十	一二五、七五
安藤	柳正	油屋	一二五、〇〇
南條	壽光	太十	一二四、七五
眞下	初音	太十	一二四、五〇
木村	一司	安逢	一二四、五〇
阿部	一	忠六	一二四、五〇
齋藤	正鳳	本下	一二四、〇〇
青木	大和	野崎	一二二、七五
堀岡	喜昇	宿屋	一一九、二五
大場	藤八	松王	一一八、五〇
早川	綱路	陣屋	一一七、二五
高橋	富穗	酒屋	一一六、五〇

昭和十四年十月十八日より三日間日本橋倶樂部に於て